

地中に眠る古代のロマン

平城貝塚第6次発掘調査で多大な成果

四国最大級の貝塚遺跡としてその名が全国に知られている平城貝塚。その歴史は大変古く、貝塚の発見は今から約120年前の明治24年にまでさかのぼります。平城貝塚は、遺跡の範囲や遺物の包含量から名実ともに四国を代表

する縄文遺跡といえ、昭和29年の第1次調査からこれまで計5回の調査が行われています。今回の第6次調査は愛媛大学考古学研究室の協力により、平成25年3月14日(木)から26日(火)まで実施しました。



平城貝塚第6次発掘調査実施の経緯

平成23年10月に開催された「平城貝塚発見120周年記念シンポジウム」において、貝層の分布範囲、貝塚外周に広がる予想される居住域、生産活動域や墓域等の確認が、今後の平城貝塚の価値を高めるうえで重要であることが示されました。

そこで、愛媛大学考古学研究室では、貝塚周辺における空間利用の把握を第一目標に掲げて町教育委員会とともに準備を進め、平城貝塚記念碑付近をポイントに定めて第6次発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査は、発見後初の記念すべき学術発掘(注1)となりました。

(注1) 特定の目的のため専門家集団が行う発掘のこと。



第6次発掘調査の状況。平城貝塚における貝層南端部の確定を目的として第1調査区(写真手前)を、貝層の外周における空間利用の検証を目的として第2調査区(写真左奥)の調査を行いました。



水洗選別作業

土壌採取、水洗、乾燥、分類の一連の作業は、手間のかかるとても細かな作業です。今回の調査でも、縄文土器片や大分県姫島産黒曜石片等が出土しました。

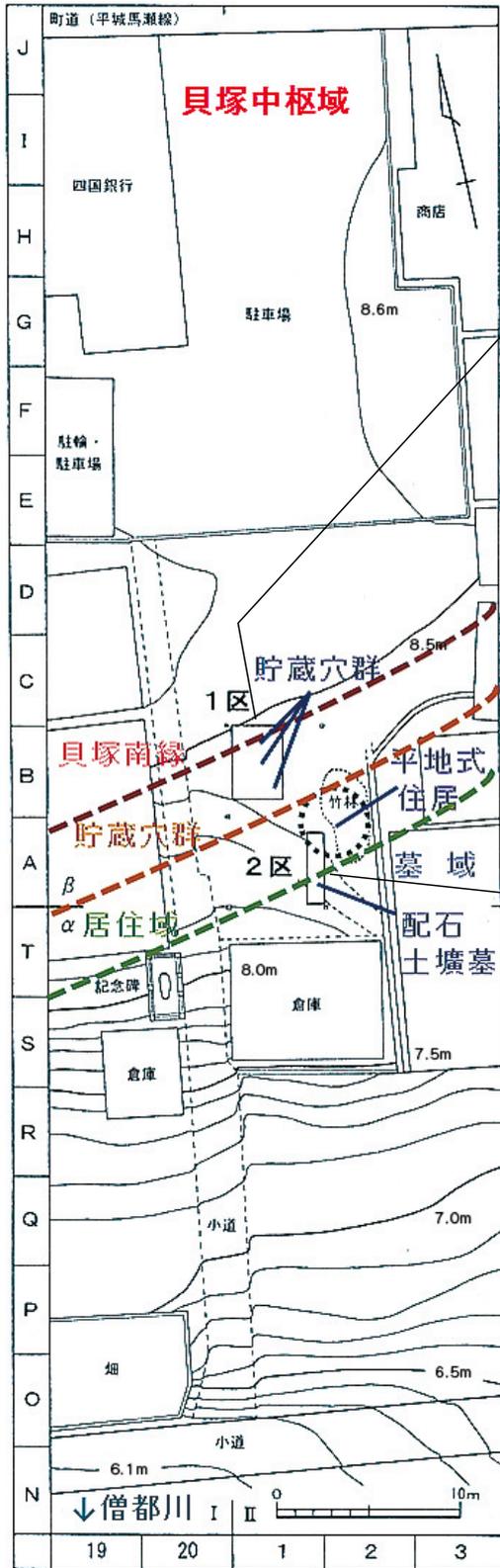


掘削作業

遺構の内部を手作業で丁寧に掘削します。非常に繊細な技術が必要です。

貝塚南側の測量と発掘成果

(提供: 愛媛大学考古学研究室)



貯蔵穴の調査状況 (1区)



2区の調査状況



配石土壙墓の調査状況 (2区)

柱穴の調査状況 (2区)

柱穴の角度から、上図の位置に平地式住居が立地していたことが推測されます。



第6次調査の成果とは

○基本的な層序(地層の順序)については、地表面から約20cm掘り下げると、近現代の土層が姿を現します。この発掘調査区は旧御荘町中心部に位置するため、宅地化等の影響から、地表下約50〜60cm前後まで近現代層が展開していました。その層の下には縄文時代後期(平城式期前後)に相当する良好な生活面が残されていました。

○貝層南側の集落構造

今回の調査の結果、当初貝層の南端付近と想定していた第1、2調査区周辺は近現代層の影響により既に純粹な貝層が遺存していませんでしたが、土層内に貝類等の混入が確認できたこと(0〜2%)で、概ね第1調査区付近が貝層分布の南端ラインであることが把握できました。

また貝層の南端部より外に居住空間(貯蔵穴や平地式住居跡の一部等)を確認することができ、更にその南側には墓域が広がっていたことを証明することができました。なかでも縄文時代のお墓である配石土壙墓(はいせきどこうぼ)は約80cm×約1.5m×2m程度と予想され、内部からは縄文土器片や大分県姫島産黒曜石片等が出土するなど、良好な遺存状況を確認することができました。これらの遺構は約3,500年前の縄文時代後期と考えられることから、貝塚形成期の様子を解明する上で、大変貴重な成果を得たといえます。



平城貝塚周辺で暮らした人々

このイラストは縄文時代の人々の暮らしをイメージしたものです。



3月23日(土)には、愛媛大学考古学研究室の幸泉満夫准教授による現地説明会が行われ、今回の調査による成果が報告されました。

第6次調査を終えて

今回の発掘調査により、貯蔵穴を有する居住区間を確認する事ができただけでなく、配石土壙墓の発見により、墓域を確認することもできました。これにより縄文時代の御荘平城における人々の暮らしが少しずつ分かってきました。全容が解明されるには、今回の発掘成果の分析に加え、更なる調査研究を進めていかなければなりません。

町教育委員会としては、多くの方々に「平城貝塚」を知っていただくことが、今後「平城貝塚」を保護し、後世に伝えていく上で非常に大切なことだと考えており、そのための学びの場の提供に努めていきたいと考えています。